# 四部合戦状本『平家物語』の和歌

## ——失われかけた独自和歌の背景

清水　由美子

### 一、はじめに

四部合戦状本『平家物語』（以下、四部本）は、真字文と呼ばれる、漢字による独特の文で書かれた、読み本系に属する『平家物語』の一伝本である。残念なことに完全な形で残っておらず、巻一のみの文安三年（一四四六）奥書本、巻四のみの永正十八年（一五一一）奥書本、巻二・四・八以外の十冊がある文安四年奥書本が現在我々の目にすることのできるすべてである。なぜ漢字で表記されているのか、先行する仮名のまじった本文があったのか、などについては様々な論がなされてはいるが、いずれも推測の域を出ていない。[1] 近年、四部本の注釈書である『平家打聞』や、四部本を引用したとされる『神明鏡』や『王年代記』などの存在が報告されているが、[2] こうした注釈書の存在や歴史書への引用が見られることは、四部本が編年性の濃い内容であることに加えて、真字本であったことがある種の権威を感じさせる効果を与えたことも想像させる。いずれにしろ、四部本が、その難解な文体にもかかわらず中世において広く享受されていたことは確かであろう。

一方、四部本も、他本同様、所々に和歌をはさみ、登場人物の心情を吐露する、あるいは落書として世相を紹介するなどといった役割を課している。ただ、これも残念なことに本文の状況よりもさらに不完全な状況にある。と言うのは、文安四年の奥書を持つ慶大図書館本などにおいて、二十数首の和歌が表記されず、一行空白のままとなっているのである。また、記載されている和歌についても表記のしかたが定まっていない。後述するように、これは本文が真字化されたことに関わって起こったことと推測できるのであるが、真字化に伴って和歌表記については揺れが見られるという事実から

は、真字化ということと和歌という文芸の持つ定型詩としての本質からくる一字一字に対するこだわりとの矛盾、さらにそれを乗り越えて正確な表記を試みた書写者（もしくは編著者）たちのこだわりを見て取ることができよう。

そして、注目すべきは、『平家打聞』をはじめとする資料の解読によって、一行空白となっていてどういう和歌があったのか不明であった部分のうちのいくつかが解明されてきていること、さらにその中に他の諸本にはない四部本独自のものが含まれていることである。和歌というものに細かい配慮を持っていた四部本の編著者が独自に作り、あるいは取り込んだ歌とはどういうものなのだろうか。本論では、そのようにして明らかにされた二首の和歌をとりあげ、その背景に見られる四部本の持つ特徴に迫ってみたい。

## 二、四部本の和歌表記

文安四年奥書本において、無表記のままにされた和歌があるのはなぜであろうか。この疑問については、これまであまり考察がなされず、真字表記上の問題か、あるいは編集上の問題かという推測がなされているだけである。[3] 今回の考察の前提をなすものであることでもあり、ある一定の結論に達しているわけではないが、現段階で持っている見通しをまず述べておきたい。

先に挙げた、書写年代の異なる三種類の現存伝本を通してみると、和歌は三様の形で表記されている。すなわち巻一のみが存する文安三年奥書本では、八首の和歌が次のように書かれている。仮名の部分の一部を万葉仮名風に表記しているのが特徴である。

風々月毛明石浦路波許古曽寄登見計礼
花山高ニ梢聞之賀土海ニ人子共古和布□□
憂節ニ沈乎不終河竹ノ代乍為名流之天
思ヒ幾哉憂月作廻リ来同雲居月見登波
桜花ナ賀茂河風セ恨那与散ニ得古曽不レ止・計ニ礼
深山木其梢共不見之桜花頭仁計里
五ニ月暗ニ名顕留今ニ宵哉黄民時毛過奴登思エ
高屋上見煙ニ立ッ民烟ニ毛饒仁ニ計ニ利

それに対して文安四年奥書本では、その八首は次の通り二通りの方法で書かれている。

ほの〳〵と月を明石のうら路ニハ
浪はかりこそ夜と見えしかも
花の山たかき木すへときゝしかと
あまの子ともかふるめひろふか
うきふしにしつみやはてん川竹の

笹にためしなき名をはなかして
思ヤ憂身乍ニ廻来テ同雲井ノ月ヲ見トハ
桜花賀茂ノ河風恨ムヨ散ヲハエコソ留サリケレ
深山木ノ其ノ梢トモ見サリシ桜ハ花ニアラハレニケリ
五月暗名ヲ顕セル今夜哉誰別時モ過スト思ヘハ
高屋ニ上テ見レハ煙立ツ民ノ烟モ饒ニケリ

この両者の比較から、斯道文庫本（慶大図書館本）『四部合戦状本平家物語』の解説は、「思ふに文安三年本と四年本は同一人の手になったもので、且、真字体に書き試みた原稿の形を残しているのではないかと思はれる」という玉井幸助氏の推察を引いて、「文安四年本の方がより整えられていることを考え合わせるならば、そして仮に両書の筆者を同一人とするならば、筆者はまず真字体で和歌を書き表そうとして、助詞を万葉仮名風に表記してみたが、それに徹することが出来ず、次に平仮名を三首試み、最後に、本文との文体の一致という見地から、真字片仮名混淆体を採用したものと思われる。」としている。[4] ただし、現存の文安四年奥書本において、最初の三首のように平仮名まじりで二行に分けて書かれている和歌は以後見えない。また、野村氏蔵本とも呼ばれる永正十八年奥書本では、現存する巻四の全編にわたって平仮名まじりで二行に分けて書かれている。[5] さらに、注意すべきは、文安四年奥書本の中でも最善本とされる慶大図書館本を検討すると、明らかに、巻一の最初の三首の墨の色は、地の文と異なっていることが見て取れ、後からの書き入れの可能性を思わせる。もちろん、漢字で書かれた地の文と、平仮名まじりのくずし字では、同一の書写者が同じ時に書いたとしても、墨の色が違ってくることはあり得ることであり、判断は難しい。しかし、地の文でいうと一行文のスペースに二行にした和歌を書き入れる書き方は、四部本の裏書きであったとされる「刀後聞」[6]のそれと似た手法であり、通じるものがあると思われてならない。

こうした推測が成り立って、文安四年奥書本の文安四年の書写完成時に、この巻一の三首も一行空白であったとすると、次のような仮説を立てることができる。つまり、文安四年の書写時に、何らかの事情（それにはおそらく地の文の一行十五文字という字数が関与するのではないかと考える。一行十五文字で、しかも一字さげで書こうとすると、万葉仮名風表記では一行に納まらない場合がある、など）で地の文と同様の表記方法で和歌も書き表そうと試みたが、その際に、仮名部分の正確な読み取りに手間取っていくつかの和歌は空白のまま残ってしまい、後に、その空白部分を平仮名交じりの和歌で補おうとしたが、その作業が巻一のみになってしまった、ということではないかと思うのである。

先述の墨の色の問題や、文安三年奥書本の三首目に「ウキフシノ〜」というルビが附されていて、これが文安四年の書写時にすでに

あったとしたら読解困難とは言えない、など矛盾点は多く、慶大図書館本以外の文安四年奥書本との関係や、平仮名交じり和歌の書き込まれた時期など問題も残り推測の域を超えない仮説であるが、例えば、永正十八年の奥書を持つ野村氏蔵本の和歌が平仮名交じりで書かれていることなどを考えれば、万葉仮名風の表記を持つ形→地の文に近い漢字と片仮名を混合した形→平仮名交じり、という、四部本の和歌表記に関する大きな流れが想定されるということは言えるのではないだろうか。三十一文字のうちの一文字でも読み方が違えば、一首全体の意味が異なってしまうこともある和歌というものの本質を考えるとき、その表記方法には地の文とは違う注意を払ったことは当然想像できるし、独特の真字表記や一行十五文字という体裁の中で和歌を正確に表記しようとすると、そこには様々な試行錯誤があったと思われるのである。四部本の真字文は、仮名交じりの文を何らかの目的に基づいて、漢文に似せて書こうとしたものとされているが、最終的には和歌だけがその意図に従わなかったと言えるのではないだろうか。

しかし、次項で述べる、四部本にあった可能性が指摘されている、維盛詠とされる歌の場合を考えると、事情はそれほど単純なものではなく、和歌の表記に関して、様々なケースがあったことが想像され、簡単に結論が出るものではないようだ。その維盛詠とされる歌は、いったん無表記となったあとで、再び、本文と同じような真字で表記された和歌があった可能性も否定できない証例かとも考えられるからである。

以上のように、四部本の和歌表記をめぐっては未解決の問題ばかりである。しかし、この四部本の書写者たちの逡巡は、逆に、仮名交じりの定型詩としての和歌というものの持つ本質や、その本質と軍記というジャンルの作品の持つ本質の関わり、という問題も孕んでいるようにも思われる。今後も追究していきたい。

## 三、維盛入水時の辞世歌

『平家物語』各諸本の巻十には、よく知られた平維盛の熊野での入水の話がある。都に残した妻子への執着から一人戦列を離れた維盛が、高野・熊野とへめぐって、最終的に時頼の説得を受け入れて熊野の沖で入水死を遂げる話である。この入水の場面は、

……忽ニ妄念ヲ飜シテ、向西叉手ヲテ、高声念仏三百余反唱澄テ、即チ海ヘゾ入給フ。　（延慶本　巻十「維盛身投給事」）

……忽に妄念を翻て正念に住し、又念仏高く唱給、光明遍照十方世界、念仏衆生、摂取不捨と誦し給ひつゝ、海にぞ入給にける。　（『源平盛衰記』　巻四十「中将入道入水事」）

……忽に妄念をひるがへして、高聲に念佛百反ばかりとなへつゝ、「南無」と唱る聲とともに、海へぞ入給ひける。

（覚一本　巻十「維盛入水」）

などと語られており、維盛は念仏の文言を唱えつつ海に飛び込んだとされている。この場面は、四部本では、一行空白をはさんで次のように語られている。

……忽飜シ妄心念仏高ク申シ

（一行空白）

入下ル海

（巻十「維盛入水」）

忽ちに妄念を飜して、念仏高く申して、

（原文一行空白）

とて、海へ入りたまひぬ。

（巻十「維盛入水」）

この一行の空白については、盛衰記のごとき念仏の文言が入り、それがやはり文字数の関係で空白になってしまったのだろうと考えていた。しかし、佐々木紀一氏が、四部本に最も近似した本文を有する、と紹介しておられる『王年代記』には、次のようにあるという。[7]

三月廿八日権亮少将維盛於ニテ那智浦ニ沈海ス、哥ニ曰ク

今ソ知ル弥陀ノ誓ノ深クシテ浪ノ上ニモ蓮スアリトハ

（後鳥羽紀、元暦元）

さらに、やはり中世年代記で、『王年代記』と共通する記事を有し、「本文は概して広略の差違を見せる」と佐々木氏が指摘される『改暦雑事記』には、次のようにあるという。[8]

三月廿八日権亮少将維盛於那智入海、歌云、

今音知留弥陀乃誓乃深ク志浪乃上仁毛蓮有志和

佐々木氏は、この両者に見られる和歌が「四部本の空白を復元するとしてよい」と断定されている。つまり、四部本のこの場面では、維盛は念仏ではなく「今ぞ知る弥陀の誓の深くして浪の上にも蓮ありとは」という辞世歌を詠みつつ入水した、ということになるのである。四部本の一行空白の前と『王年代記』のこの歌の前の本文が全く違うものなので、この一首が本当に四部本の空白部分に当たるのかどうか若干の不安は残るが、ここでは全体を検討された佐々木氏の結論を受け入れておくこととする。もしも、この一首が四部本の空白部分に該当しなくても、『王年代記』と四部本の近さは確か

なようで、その場合にそうした改変をした人物の周辺の関心のありかを考えることも意味がありそうだからである。また、この維盛詠とされる一首の歌が、読み本系の『平家物語』と関係があることは事実だと考えてよい。と言うのは、佐々木氏も指摘するが、この歌は、読み本系諸本の壇ノ浦の場面で、二位尼時子が安徳帝を抱いて海にとびこむ時に詠んだとされる辞世歌「今ゾシルミモスソ川ノ流ニハ浪ノ下ニモ都アリトハ」（延慶本巻十一「壇浦合戦事付平家滅事」）に似ているからである。似ているというよりもじりに近い。この二位尼辞世歌も、現存四部本では一行空白であるが、佐々木氏によれば『王年代記』にもあるということであり、[9] また、四部本以外の他の諸本読み本系が同じ歌を持つので、四部本でも、二位尼の辞世歌としてこの歌があったというのは間違いないだろう。維盛詠とされるこの独自歌は、二位尼辞世歌を受けて四部本のこの場面に挿入されたと考えてよい。二位尼にとっても、維盛にとっても、入水を前にしての心情を吐露するものとなっている。

平安期以降に行われた往生作法として補陀落渡海という習慣があったことはよく知られているが、この維盛の入水も、『平家物語』ではその習慣と結びつけて語られているということに関してはすでに多くの指摘があるところである。[10] 補陀落渡海そのものにも、すでに臨終を目前にした僧侶を浄土に送る一種の葬送儀礼であると考えられるものから、現実での死というものを超越して、自ら信ずる浄土への渡海を目指した旅立ちととらえられていたものなど、実態は様々だったようであるが、[11] いずれにしても浄土への渡海であるという点が、現代社会での自死とは本質的に異なる。維盛の場合も、二位尼の場合も、物語においても追いつめられた結果選びとらざるを得なかった死なのであって、仕方なく死ぬけれども死後は浄土に迎え取ってほしい、と願いつつ死に赴くという状況である。維盛の場合、物語ではそこに高野、熊野といった場所と、時頼という善知識を配することで、専ら浄土への渡海という、一段と高い宗教的境地に達した人物として語られていくのである。四部本の編著者（あるいは書写者）は、そうした死のあり様へのさらに強い興味から、その時の維盛の心情をのぞきこもうとしたのではないか。そこには補陀落渡海という特殊な行動をとる人物への関心が感じられる。そして、その心情吐露の方法として和歌という形態を選び、すでにあった二位尼辞世歌を援用する形でその意図を実現したのであろう。二位尼の自死もまた、補陀落渡海をする人々の心情と通ずる、浄土への志向のもとで語られるべき出来事であったということかも知れない。

さらに、指摘しておくべきなのは、この維盛詠とされた歌と、四部本巻五にある洲崎明神託宣歌との関係である。維盛詠とされた歌が二位尼の歌のもじりであって、同時に『平家物語』によく出てくる落書などとされる和歌と同じレベルのものであることは一見して

明らかであるが、同じように、次の場面の洲崎明神託宣歌も二位尼の辞世歌と結びつくと考えられる。

佐殿其夜詣洲崎明神御拝殿
有御神楽一番、三十計女人神着セ下歌占ヲ
源ハ同流ト石清水只閃上コ雲ノ終マテ
佐殿流ト喜感涙流次十二三計女人神着セト
心喜気　六原ハミモスソ河ノ流ソヤ只閃下セ浪ノ下マテ
人々大ニ喜憑シカリ　（巻五「東国武士頼朝許参」）

佐殿、その夜は、洲崎明神に詣でゝ、御拝殿にて御神楽一番有りけり。三十計りなる女人に神着かせたまひて、歌占に、
源は同じ流れと石清水只閃上げよ雲の終まで
佐殿、喜びの感涙を流したまふ。次には十二三計りなる女人に神着かせたまひて、心喜し気にて、
六原はみもすそ川の流れぞや只閃下ろせ浪の下まで
人々、大きに喜びて憑もしかりけり。
（巻五・東国武士頼朝の許へ参る事）

これは、挙兵後石橋山の戦いに敗れた頼朝が安房に渡り、当地の洲崎明神に詣でた夜に、十二、三歳くらいの女人に憑依した神が託宣した歌である。同様の場面は、頼朝挙兵譚を詳しく記す読み本系『平家物語』諸本や『義経記』などに描かれているが、例えば延慶本では、

其夜ハ兵衛佐安房国安戸大明神ニ参詣シテ、千反ノ礼拝ヲ奉テ、
源ハ同流ゾ石清水セキアゲ給ヘ雲ノ上マデ
其夜御宝殿ヨリ気高キ御声ニテ、
千尋マデ深クタノミテ石清水只セキ上ヨ雲ノ上マデ
（巻五・十八「三浦ノ人々兵衛佐ニ尋合奉事」）

とあり、ここで二首の歌は四部本以外の諸本及び『義経記』でほぼ共通している。つまり、四部本のこの場面の二首目の歌「六原は……」のみが独自であり、さらに注目すべきはそれが二位尼辞世歌と相通じ、しかも御裳濯川の流れに連なる「六原」すなわち平氏を波の下まで流してしまうように、という特異な内容と読めることである。二位尼辞世歌が読み本系諸本のすべてにあり、また、洲崎での二首も四部本以外の諸本で共通することを考え合わせれば、この「六原は……」の歌が四部本編著者の改編と考えざるを得ない。筆者はかつて、この二首の呼応が、頼朝の挙兵の始まりと終わりを結ぶ意図によるものと推察したことがあるが[12]、ここに、維盛詠として作られた一首を並べてみると、むしろ、洲崎という場所、つまり海

や波というモチーフのつながりを考えるべきであったかもしれない。そして、その時にやはり目を引くのが本来皇統の流れの悠久を寿ぐ言葉として使われるべき「御裳濯川の流れ」という歌句の使い方である。この時代にあって、こういう皇統をさげすむような歌を作る人物はどういう社会的地位にある人なのだろうか。

この二位尼の歌を応用した二首を作ったのが同一人物でないことも、当然考えられよう。その場合でも、そうした複数の人物を擁したある文化圏というやや広い範囲で、その特徴を考えることは有意義なことであろう。

もう一点付け加えておくべきなのは、この維盛詠とされた歌の書き入れの時期に関してである。すでに述べたように、この歌のある部分に、他の諸本では念仏の文言が当てはまっていることを考えると、四部本でももともとそうした念仏を示す言葉が入っていて、字数の関係などで、いったん空白になって、その後そこに「今ぞ知る……」という歌を書き入れた可能性も浮上するのである。現存四部本の「最終的改作」については佐伯真一氏の詳細な検討があるが、[13] それらからまた一段階あとの書き入れであった可能性もあるのである。しかし、この時期の問題については、今後の調査を待つしかなく、ここではこの歌を書き入れた人物の補陀落渡海や入水への強い関心、その関心を二位尼辞世歌のもじりというかたちで表現した方法、さらに洲崎明神託宣歌との関連、そしてそこから見渡せる四部本の成立圏の様相の一端を指摘するにとどめざるを得ない。

## 四、巻十一の実定詠

前項で指摘した入水への関心を示すものとして、もう一つの事例を挙げたい。巻十一の壇ノ浦の場面の、二位尼と安徳帝の入水の話のすぐあとに挿入された四部本独自の次の和歌説話である。

……二位
殿今限思ドケレ練ッ袴ッ傍ッ高挟ミ奉懐先帝帯ヒ奉
結イ合セ我御身宝剣差シ腰神璽挟腋引負
鈍色二衣ヌ

（一行空白）

入リヌ海へ悲哉無常劇シキ風忽奉ル散シ花躰ニ心憂
哉分段荒波ニ早ク奉沈メ玉ニ躰擬殿長生門
被レ立不老トコヅ雲上龍下成ドフ海底魚トツ抑皇后
宮大夫俊成卿集ニ撰之間後徳大寺左
大将実定卿秀歌太多読ミ送中

（一行空白）

有ケレ乍ラ感シ珍重此歌有禁忌モ不被入今思
合スレ不思議

（巻十一「先帝入水」）

二位殿は、「今は限り」と思ひたまひければ、練袴の傍高く挟みて、先帝を懐き奉り、帯にて我が御身に結ひ合はせ奉りて、宝剣をば腰に差し、神璽をば脇に挟みて、鈍色の二衣引き負き、

（原文一行空白）

海へ入りぬ。悲しきかな、無常の劇しき風、忽ちに花の躰を散らし奉る。心憂きかな、分段の荒き波、早く玉躰を沈め奉る。殿をば長生と擬ふ。門をば不老とこそ立てらるれ。雲上の竜下りて、海底の魚とぞ成りたまふ。

抑も皇后宮大夫俊成卿、集撰の間、後徳大寺左大将実定卿、秀歌を太多読み送られける中に、

（原文一行空白）

と有りければ、珍重しく感じ乍らも、「此の歌、禁忌も有り」とて入れられず。今思ひ合はすれば不思議なり。

（巻十一「先帝身投」）

この前の方の空白には、すでに述べてきた二位尼辞世歌「今ぞ知るみもすそ川の流れには浪の下にも都ありとは」が入ることが確認できる。後の方の空白には、後徳大寺実定の「なごの海のかすみのまよりながむればいる日をあらふおきつしらなみ」が入っていただろうと推測できる事が、早川厚一氏によって報告されている。[14] 早川氏が推測の根拠となさったのは、四部本の注釈書とされている『平家打聞』の記事である。それには、この和歌の注と思われる次のような説明がある。

欲入日洗者、先帝、喩ヲ日ニ、行幸、在レ二西国一、日ノ入方ナレバ、云入日トハ、終ニ崩御ドヘハ、喩入日一、洋津白波者、凶徒等ノ名、自本恋人云、洋津白波、在二日本紀、无キ大気一有レ心一、爾云、[15]

四部本の本文と照合すると、この説明はこの空白部分のものであると考えるのが妥当であろうし、実定にこうした歌があることから、早川氏の推測は間違いないと思われる。

『伊勢物語』第二十三段に見え、『古今和歌集』の巻第十八・雑歌下にも入集している有名な歌に「風ふけばおきつ白浪たつた山よはには君がひとりこゆらむ」（九九四）があるが、これにつけられた『伊勢物語』の古注釈や『古今和歌集』の注釈には、「白浪」を「ぬす人」の喩えであるとする説明が見られる。例えば、細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』には「又白波は盗人の事也。立田山にぬす人有を云といへり。盗人をしらなみといふは、荘子よりおこれり」とある。[16] 契沖の手になる『古今余材抄』には『後漢書』の故事にその由来を求める説明がある。[17] それから考えると、この『平家打聞』の「恋人」は「盗人」のことか、その誤写と考えていいだろう。この「風ふけば～」の歌に関しては、顕昭の説などで、「白浪」と「盗人」

の関係が否定された解釈の方が広まったようであるが、このような中国の故事にもとづいて両者を結びつける言説もかなり広まっていたのだろう。また、同じく『古今余材抄』には『日本書紀』の「神武紀」の中に「立田山」の険しさを述べる部分があることと、「立つ」という語を介して「おきつ白浪」がつながると説明されており、『平家打聞』に「在日本紀」とあるのもそうした解釈を指すのではないかと考えられる。いずれにしても、おそらくこの『平家打聞』の説明は、四部本本文の「分段荒波―早〻奉沈〻二玉―躰」をうけて、それを実定詠の「おきつ白浪」と結びつけることで「有禁忌」を説明しようということではないかと思われる。注釈によく使われた文言を駆使した説明なのではないだろうか。

この実定の歌は『新古今和歌集』の巻一・春・三十五番に「晩霞をよめる」という題で入っている。四部本の編著者は、おそらくこのことも承知の上で、『新古今和歌集』に選ばれた歌が、実定と同時代とも言える俊成の撰になる『千載和歌集』に入っていないことに注目し、俊成が禁忌と判断したこの歌がまるで平家の運命を予告するようなものであったと述べているのである。しかし、こうした説明を、この壇ノ浦の場面に入れることは、やはり、あまりにも唐突であり、洗練されたものであるとは言えない。その意図がどこにあるのか、一読した限りではよくわからないと言える。佐伯氏が、この事例に「どうということはない歌を不吉な歌と規定するあたり」に「和歌に対する感覚の異質さ」を見て、またこの記事を「自由奔放・荒唐無稽な創作・改作」とされるのも理解できる。[18]

実際の和歌史の上で、この歌の『千載和歌集』不採用、『新古今和歌集』入集の理由として考えられるのは、一言で言ってしまうと、この歌の詠歌当時の低い評価である。それは、鴨長明の『無名抄』の次の記事から明らかである。

俊恵云、哥は秀句をおもひゐたれども、すゐいひかなふることのかたきなり。後徳大寺左府の御哥に、

なごのうみのかすみのまよりながむれば
いる日をあらふおきつしらなみ

頼政卿哥に、

すみよしの松のこまよりながむれば
月をちかゝるあはぢしまやま

此両首、共にかみの句おもふやうならぬ哥也。いる日をあらふといひ、月をちかゝるなどいへる、いみじき詞なれど、むねこしの句をばゐいひかなへず。遺恨のことなり。

この話は有名だったようで、鎌倉時代の成立とされる『歌枕名寄』にも

後嵯峨院御時古歌連歌に、なごの海の霞のまよりながむれば、と云ふ句出来けるに、月落ちかかる淡路しま山、とつけられけり、同座に又後に、住吉の松のひまよりながむれば、と出来けるに、入日をあらふ奥つしら波とつけられけり、人人入興云々[19]

という逸話が載せられている。長明は、この歌について末の句がよいのに、上の句が悪くてバランスが取れていないと言っているのであろうが、この歌について細かく見ていくと、当時受け入れられなかった理由と思われる点がいくつか見出される。それは、後世の鑑賞者にとっても同様であったようで、例えば、正岡子規は、「この歌の如く客観的に景色を善く写したるものは、新古今以前にはあらざるべく、これらもこの集の特色として見るべき者に候。惜むらくは「霞のまより」といふ句が疵にて候。一面にたなびきたる霞に問といふも可笑しく、縦ひ問ありともそれはこの趣向に必要ならず候。入日も海も霞みながら見ゆるこそ趣は候なれ。」と述べている。[20] この「霞の間より」という表現については、諸注釈においても解釈や評価の分かれるところであって、やはり難点と言えるのかも知れない。「霞の間から眺める」という表現自体は珍しいものではなく、

山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

（古今和歌集・恋四・四七九・人の花つみしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後によみてつかはしける・紀貫之）

待たれつる花のさかりか吉野山霞の間よりにほふ白雲

（式子内親王集・一〇九）

花の色にうつる心はやまざくらかすみのまより思ひそめてき

（六百番歌合・六四八・藤原隆信／隆信集・四七三）

などと用例が見られる。問題は、「霞の間」から「眺める」対象であって、式子の歌も霞の間から見た「白雲」は桜の見立てであり、その他もほとんどの場合において、「霞の間」から眺めるものは桜の花であると言え、それ以外の、ここでいう遠い水平線の夕日を眺めるなどというのはあまりない。この歌の後、

春の夜のかすみのまより山のはをほのかにみせて出づる月かげ

（続拾遺和歌集・春下・一二九・弘長三年、内裏百首歌たてまつりし時、春月を・藤原為氏）

などという用例も見られるが、実定の時代では、かなり珍しく違和感を持って受け入れられていたことが想像できる。それに対して初句と末句の「なごの海」「おきつしらなみ」が、『万葉集』に用例が多い、いわば伝統的な表現だったことも、据わりの悪さを呼び起こしたのではないだろうか。さらに、叙景歌として考えた場合の、「いる日をあらふおきつしらなみ」という表現の屏風歌のごとき遠近感のなさもあげられよう。俊成が採用しなかったのも理解できるように思えるのである。

それが『新古今和歌集』にいたって入集という名誉を得たのは、

そうした俊成や実定の時代の評価を覆す後鳥羽院の高い評価があったからであった。後鳥羽院は、この歌を踏まえて、

なごの海のいる日をあらふ浪のうへに春のわかれの色をそへつつ

（後鳥羽院御首・七〇〇・詠五百首和歌・春百首）

見わたせばなだのしほ屋の夕暮に霞にかかる沖つしら浪

（続後撰和歌集・春上・三八・題しらず／後鳥羽院御集・六二〇・春百首）

という歌を詠んでいる。具体的な実定詠に対してのコメントのようなものは管見の限りでは見出されないが、「なごの海の……」の歌を高く評価したからこそ、それをとって自ら作歌したことは間違いないだろう。さらに、『新古今和歌集』では、この実定詠の次の歌として、後鳥羽院の詠「見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん」が配されている。実定が詠んだ当時は酷評された歌が『新古今和歌集』には入集した理由はそこにあったのだろう。もちろん、その背景には、後鳥羽院の好みというだけでなく、彼が中心となった歌壇で作られていった「新古今風」とも言える和歌観の新しい流れがあったのであり、それは子規の指摘の通りであろう。

それでは、俊成が「有禁忌」としたなどとするのは、こうした和歌の世界の事情に疎かった四部本編著者の創作なのだろうか。

この実定詠は、彼の私家集『林下集』にも収められていて「按察使公通卿、十首題を人〳〵によませはべりしに」という詞書があることからもわかるように、藤原公通家で行われた十首歌の歌会で詠まれたものである。この歌会は承安二年におこなわれたもので、この時期の実定は、いわゆる「沈淪期」にあった。この時の歌会の歌は散佚してしまっているが、松野陽一氏が詳細に調査されて、ほぼその全容が明らかになっている。[21] それによると、その時に「晩霞」という題で歌を詠んだことが分かっているのは、実定、藤原重家、源頼政、藤原公重、平親宗、俊恵、観蓮、藤原清輔、などである。松野氏は、この会に俊成が参加していなかったことを指摘し、そのことがこれらの歌に対する俊成の評価に関与していると述べておられるが、四部本の記事に関してもそれが何らかの影響を与えた可能性は考えてよい。しかし、それ以上に注目されるのが、この時に詠まれたと思われる清輔の「夕しほにゆらのとわたるあまを舟かすみの底にこきぞ入ぬる」という歌である。これについて、『無名抄』に次のような記事があるのである。

……ある所の哥合に、かすみを、俊恵が哥に、

ゆふなぎにゆらのとわたるあまをぶねかすみのうちにこぎぞいりぬる

そのたびの会に、清輔朝臣、たゞをなじやうによみたりしにとりて、かれは、かすみのそこにとよめりしを、人の、入海かとおぼゆと難じ侍し也。

この「入海」について、岩波古典文学大系本の頭注では「入江」とするが、入江では人々が難じた理由がわからない。ここでは海に入水するという事をいい、それがよくないと批判されたということであろう。もちろん、その批判のうらには、俊恵の歌との酷似を非難する気持ちがあることが想像できるのだが、このように、ただ単に海面の霞の中に入っていき、そこを「底」といっただけで、人々は「入海」を想像したということに注目したい。実定詠についても、この歌から「入海」を想像する人がいても不思議ではなかったのではないだろうか。さらに、四部本編著者が、『無名抄』のこの記事を知っていた可能性も十分考えられる。

また、この実定詠が、入水からの連想として語られる理由の一つに、この歌が「なごの海」と呼ばれて和歌でよく詠まれた場所には、富山県新湊市放生津の海があり、その地に赴いた万葉歌人大伴家持の詠んだ歌が多く残っているが、もう一ヵ所に摂津の住吉の浜がある。実定の歌についても確定できないのであるが、『歌枕名寄』などは住吉ととっていて、『新古今和歌集』の古注釈などをみても住吉説のほうがやや多い。住吉の浜であった場合にすぐ思いつくのが、四天王寺の西門で平安期以降さかんに行われていた日想観の行である。『観無量寿経』で説かれる、日没を拝んで浄土を観想する行は、『閑居友』などにも見られ、また、和歌でも取り上げられている。俊成にも、

いまぞこれいり日をみても思ひこしみだのみくにのゆうぐれのそら

（長秋詠草・四四八）

という歌があり、俊頼も、

色色の雲のはたてをかぎりにている日や弥陀のひかりなるらん

（散木奇歌集・九〇四）

と残している。鎌倉時代に入っても、定家の撰になる『新勅撰和歌集』には、

さはりなくいる日を見てもおもふかなこれこそにしのかどでなりけれ

（釈教・六二二・天王寺の西門にてよみ侍りける・郁芳門因安芸）

にしのうみいる日をしたふかどでしてきみのみやこにとほざかりぬる

（釈教・六二三・おいののち天王寺にこもりゐて侍りける時、ものにかきつけて侍りける・後白河院京極）

などが取られていて、四天王寺に近い住吉のなごの海で日没を眺めるといえば、この日想観が思い起こされる、という可能性は十分あるだろう。四天王寺の沖で入水した僧の話が『続古事談』にもある。

このように見てくると、「なごの海……」の歌も、『新古今和歌集』とは全く違うこうした評で語られていた可能性も考えられるし、四

部本編著者の創作であったとしても、二位尼と安徳帝の入水のあとに、こうした話をとりいれた態度はそれなりに意味があるものであり、単なる王朝文化への興味とか、和歌の知識の披瀝をねらった場違いな挿入であると切って捨てるわけにはいかなくなるのである。

また、ここで実定の歌が選ばれたというのも、四部本編著者にとっては、理由のあることであろう。実定が、『平家物語』の中で、史実からは離れた造型も含めて、たびたび登場しているのは周知の事である。[22] 和歌をもって何かを語ろうとするときに、呼び出す人物として最もふさわしかったのだろう。さらに、この場面で、俊成の『千載和歌集』撰集とあわせて語られるのは、平氏一門の都落ちをめぐる一連の話のもじりのようなものではないだろうか。福原に遷都した後で、荒れた旧都に戻って妹である大宮多子と月見の歌を作って昔を偲んだのが実定であり、後年平氏一門が都を落ちて再び帰ることのない旅立ちをした時に、忠度が立ち戻って一首の歌を届け、それを「よみ人知らず」として『千載和歌集』に入集させたのが俊成である。実定と俊成は、和歌的情趣をもって平氏の運命を見守った都人を代表する二人なのである。安徳帝の死を見届け、平氏の滅亡を見送る場面にふさわしいのもこの二人以外には考えられなかったのであろう。その時、『無名抄』の話、もしくはそれらから作り上げられた「かすみ」「海」「入日」という語のつながりから来る、後鳥羽院のそれとは違うイメージを知っていた編著者がそのイメージを応用して作り上げたのがこの話なのではないかと考えるのである。最近、五味文彦氏が、長門国阿弥陀寺と実定の子息公継の深い関わりを、『平家物語』成立の背景として指摘されている。[23] そういった意味でも、この四部本の独自説話は興味深い。

## 五、四部本の方法——まとめに変えて

『吾妻鏡』天福五年五月二十七日条には、智定坊と名を変えた下川辺六郎行秀が、同年三月七日に三十日分の食物と油を積んだ舟に乗り込み、外から釘を打ちつけられて、熊野の那智沖に漕ぎだしたという記事がある。平氏追討や奥州藤原氏追討で活躍した行秀が、どのような経緯で晩年このような行動をとるに至ったのかは明らかでない。しかし、この出来事は、人々の間に広まり、やがて説話化され、江戸の社会でも広まっていたという。[24] 現代の我々とは全く違った宗教観を持つ中世の人々であっても、やはり生きながら海に飛び込んだり、生きながら海に漕ぎだして戻って来ないという行動は衝撃を持って受け止められていたに違いない。この四部本の独自和歌をめぐる二つの事例にしても、その背景に当時の社会の人々の入水という行為への関心を読み取るべきだと思うのである。そして、その社会とは、階層的にも地域的にもかなり広い社会、皇室をおとしめるような和歌を作ってしまう階層にまで広げて考えてもいいのではないかと推測している。

さらに、維盛と二位尼の自死を補陀落渡海と結びつけて、和歌のもじりという方法で繋いでいく方法は、壇ノ浦の場面に平氏の運命に関わった都人の代表である実定と俊成を呼び出し、和歌の情趣を援用することで、浄土への志向という結構でまとめようとする方法と相通じるものであり、かつ、他の読み本系諸本のこれらの場面には見られない特徴である。四部本では、例えば袈裟と文覚の話に室町物語と近いパターンが見えることなどが指摘できるが、[25]こういう方法も御伽草子などの手法と近いものが感じられる。冒頭でも述べたように、四部本は中世においてかなり享受されていたことが想像される。その理由は、真字化による歴史書としての権威付けの成功ということも考えられるが、案外、こうした内容によるところも大きいのではないかとも思えるのである。

また、今回見てきた四部本編著者の和歌の扱い方は、軍記の成立における和歌の持つ世界の影響の大きさを考えさせる例ではないだろうか。和歌というジャンルの文芸は、『平家物語』の成立時、すでに何世紀にもわたる累々とした営みの積み重ねの上にあった。『平家物語』にとりこまれた和歌それぞれの背後にあるそうした積み重ねによる深く広い世界が『平家物語』の世界をも豊かなものにしているのである。取り込み方の巧拙はさておき、四部本の編著者は、そうした和歌の力に対してかなり自覚的であったと言えるだろう。

引用本文は以下の通り。

四部合戦状本『平家物語』（文安四年奥書本）
——慶応大学附属研究所　斯道文庫編『四部合戦状本平家物語』（大安）
四部合戦状本『平家物語』（文安三年奥書本）——静嘉堂文庫蔵本（影印）
※四部本の引用で長文におよぶものには、高山利弘『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂、一九九五・三）より訓読文も引用して直後に付した。
延慶本『平家物語』（巻五、十）——『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）
延慶本『平家物語』（巻十一）——『延慶本　平家物語　本文篇』下（勉誠社）
源平盛衰記——慶長古活字版『源平盛衰記』（勉誠社）
覚一本『平家物語』——古典文学大系『平家物語』（岩波書店）
『無名抄』——『鴨長明全集』（貴重本刊行会）
和歌の引用は、基本的に『新編国歌大観』によった。

（1）谷口耕一「四部合戦稿本平家物語の素性」（『語文論叢』一一、一九八三・九）、早川厚一「「四部合戦状本平家物語」と真字表記」（『国語国文学論集』一九八四・四）、同「四部合戦状本平家物語真字表記論考」（『国語と国文学』一九八四・九）、高山利弘「四部本平家物語に関する試論」（『語文論叢』一二、一九八四・九）、『平家物語研究事典』（一九八七、明治書院）「真字本」の項、など。

(2) 早川厚一「『平家打聞』と『四部合戦状本平家物語』」(『名古屋学院大学論集』一九八八・一)、佐々木紀一「『神明鏡』依拠の四部合戦状本『平家物語』について(上)」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』三三、一九九八・三)、同「同(中)」(『同短大生活文化研究所報告』二六、一九九九・三)、同「同(下)」(『同短期大学紀要』三四、二〇〇〇・一二)、「『王年代記』所引の四部合戦状本『平家物語』について(上)」(『同短大生活文化研究所報告』二八、二〇〇一・三)、同「中世諸書所引四部合戦状本『平家物語』近似本文について」(『米沢国語国文』三三、二〇〇四・一二)など。

(3) この問題に正面から取り組んだのが、山下宏明「いくさ物語と和歌——四部合戦状本『平家物語』の場合——」(『王朝和歌と史的展開』笠間叢書三〇七、一九九七・一二)である。空白部分の一つ一つについて検討し、該当するであろう和歌を推定していて、参考となる。その他、早川氏の注1の論文、及び「『平家打聞』と『四部合戦状本平家物語』」(名古屋学院大学論集』一九八八・一)

(4) 慶応大学附属研究所　斯道文庫編『四部合戦状本　平家物語』(大安、一九六七・三)

(5) 翻刻は、野村精一「四部合戦状本平家物語巻四(資料紹介)」(『文学』三四—一一、一九六六・一一)

(6) 注4に掲載。

(7) 『王年代記』所引の四部合戦状本『平家物語』について(上)」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』二八、二〇〇一・三)

(8) 注7に同じ。

(9) 注7に同じ。

(10) 益田勝美「フダラク渡りの人々」(西尾実・小田切秀雄編『日本文学古典新論』河出書房新社、一九六二・十二、のち『火山列島の思想』筑摩書房、一九六八・七)角川源義「落日の幻想」(『日本文学の歴史』第四巻(一九六七・八、のち『角川源義全集』第二巻、角川書店、一九八七・一〇)や、冨倉徳次郎『平家物語全注釈』下巻(一)(角川書店、一九六七・一二)。

(11) 根井浄『補陀落渡海史』(法蔵館、二〇〇一・一一)など。

(12) 拙稿「読み本系『平家物語』の方法—洲崎神社参拝記事と八幡託宣歌をめぐって—」(『古代中世文学論考』一二、新典社、二〇〇四・五)

(13) 「四部本『平家物語』最終的改作の輪郭」(『青山語文』二六、一九九六・三、のち『平家物語遡源』一九九六・九)

(14) 注3の論文(「『平家打聞』と『四部合戦状本平家物語』」)。

(15) 黒田彰「島原松平本『平家打聞』〈影印・下〉」(『愛知県立大学文学部論集・国文学科編』三六、一九八八・二、のち『日本文学説林』和泉書院、一九八六・九)

(16) 岩波新古典文学大系『竹取物語　伊勢物語』に所収。

(17) 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(右文書院、一九八七・四)参照。

(18) 注13の論文。

(19)『新編国歌大観』より。

(20)「九たび歌よみに与ふる書」(『歌よみに与ふる書』岩波文庫、一九八三)

(21)「公通家十首会歌集成稿」(井上宗雄編『中世和歌　資料と論考』明治書院、一九九二・一〇、のち『鳥帯　千載集時代和歌の研究』風間書房、一九九五・一一)

(22)櫻井陽子「徳大寺家の人々をめぐって」(『あなたが読む平家物語』2、有精堂、一九九四・一)、中村文「後徳大寺実定の沈淪」(『立教大学日本文学』四六、一九八一・七、のち『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院、二〇〇五・六)など。

(23)「長門阿弥陀寺・西山往生院・鎌倉永福寺―『平家物語』成立の背景―」(『海王宮―壇之浦と平家物語』三弥井書店、二〇〇五・一〇)

(24)注11に同じ。

(25)これについては研究史も含めて別に論じた(「袈裟の転変―中世から近代まで」(『説話の界域』笠間書店、二〇〇六・六刊行予定)。